

# 地域畜産振興部門

鳥取県

鳥取県畜産農業協同組合

(代表理事組合長 鎌谷 一也)

「農業・畜産の

“センチュリープラン(百年計画)”

— 持続できる農畜産業を目指して —



鳥取県畜産農業協同組合のみなさん

鳥取県畜産農業協同組合は、前身となる「東部畜産農業協同組合」設立(1980年)から約20年をかけて、組合員酪農家(正組合員108戸)の副産物であるヌレ子のほ育・育成・肥育・加工に取り組み、京都生協との産直事業を通じて、組合員の副産物の付加価値形成を図ることに成功してきた。

その間、生協との交流拠点として「COOP美歎(みたに)牧場」(1990年)の整備、東部ほ育センター設立(1994年)、さらに、食肉処理加工場、直売所、試食体験施設を含む「フレッシュパーク若葉台」の設立(1998年)など積極的投資を行いながら、生産から販売まで食肉の一貫したフードチェーンと「COOP鳥取牛」を確立した。

これらの事業展開により、組合員の所得確保に貢献することはもちろん、地域雇用の拡大に貢献し、生協組合員を中心としながら消費者との交流を積極的に行ってきた。

以上のほぼ20年を第1期とすると、再生産可能な畜産・農業のあるべき姿を、①環境の積極的保全、②農業後継者の確保、③有限な資源の循環、④健康への食を通じた積極的な関わり方、⑤都市と農村との共生、⑥食糧の自給、に求めるセンチュリープランの理念を掲げて、新たな実践を始めた2001年以降を第2期と位置づけることができる。

まず、2001年から遊休水田を中心に稲発酵粗飼料の生産に取り組み、畜産農家に供給するとともに、たい肥を水田に還元する資源循環型農畜産業構築に取り組んでいる。この耕畜連携に貢献したのが、当該農協が出資した(株)東部コントラクターであり、耕畜連携のコーディネート機能を果たすとともに、最近では飼料用トウモ

ロコシの生産販売にも貢献している。

1999年に設立された(有)TMR鳥取(農協も出資)は、地域で生産される稲発酵粗飼料と生協商品等の製造過程で発生する食品副産物のエコフィードを利用して資源循環型TMRを酪農家、肥育農家、直営牧場に供給している。このTMRを給与した新産直牛を2003年から「こだわり鳥取牛」のブランドで販売している。

2005年には、ほ育センター、直営肥育牧場、食肉加工センター、やきにく工房、直売店を対象に、ISO22000(食のマネジメントシステム)を取得し、牛肉の生産現場から食卓までの安全を担保するシステムを確立している。

さらに、生協と提携しているCOOP美歎牧場と農協本所・加工場のあるフレッシュパーク若葉台における産直フェスタ、産直フォーラム、農業・畜産体験事業、京都生協からの応援ボランティアの取り組みを中心に、生協組合員、地元消費者との交流を極めて積極的に行っている。

設立当初からの生協との協同組合間協同にとどまらず、100年というスパンで資源循環、食の安全確保、都市と農村の共生を理念に掲げ、今日的な政策課題となっている安全な畜産物の6次産業化に供給体制を、理念だけでなく経済的、合理的に確立している点は、畜産業に対する今日的、社会的な要請に答えているといえる。

以上のように、鳥取県畜産農協は壮大な理念を堅実に実践へと結びつけ、畜産物の安全なフードチェーンを構築することで、新たな食と農の再生に到達している。

これらの活動は、(社)全国肉用牛振興基金協会が実施する国産牛肉地域牛肉地域ブランド化推進事業なども活用し、畜産業の地域への多大な貢献をしている。

# 活動のようす



## ▲ COOP 美敷牧場全景

肥育牛舎のほか、交流の森、ふれあい研修館、乳製品学習工場、搾乳牛舎、キャンプ施設、バーベキューハウスが併設されている



## ▲(株)東部コントラクターの職員 耕畜連携のコーディネート機能を果たしている



## ▲ 稲発酵粗飼料による牛肉生産

地域で生産される稲発酵粗飼料と生協商品などの製造過程で発生するエコフィードを利用している



## ▲ 飼料用稲の生産

遊休水田を中心に稲発酵粗飼料の生産に取り組み、畜産農家に供給するとともに、たい肥を水田に還元する資源循環型農畜産業を構築している



## ▲ 田植えや除草体験、収穫作業の見学

どのようなエサを給与して牛肉ができるかを消費者に理解してもらうことに努めている



## ▲ 生協組合員との学習会

生協組合員、地元消費者との交流を積極的に行っている